

漢方内科

漢方とは？

漢方＝漢方薬と思われがちですが、東洋医学には漢方薬を用いた治療法のほかにも養生・気功・薬膳等があります。漢方医学では患者さんの症状だけでなく、体質や生活習慣などを総合的に判断し、個人個人に合った適切な治療を選択していきます。西洋医学では病名によってその治療法が決まることが多いのですが、漢方医学では、体のバランスを整えることで治療しようと考えます。例えば、冷えていれば温める、滞っていれば巡らせる、不足していれば補うといった方法です。従って、同じ病名であっても、患者さんによって処方される漢方薬が異なってきます。また、病名がつかない不調（未病：病気が起こる前段階）にもアプローチできるという特徴もあります。つまり、西洋医学は病気を診るのに対し、漢方医学は患者さん全体を診るオーダーメイド的な治療といえます。

当院では漢方医師による診療を行っております下記のような症状があれば漢方で解決できるかもしれません。

- ・調子が悪く、病院に行っても異常がないと言われる。
- ・病院に定期的に通っているけど症状が緩和しない。
- ・今の状態でも生活に支障はないけど、もっとよくする方法があれば取り入れたい。

漢方は内科、婦人科、皮膚科、整形外科など、病院の科に関係なく治療対象となりますので、該当するお悩みがある方はぜひ一度ご相談ください。

どんな病気にむいているの？

基本的にはどのような病気でも治療の対象になりますが、一般的には以下のような疾患に効果が期待されます。

内科疾患（風邪、胃腸炎、片頭痛、気管支喘息など）

皮膚疾患（アトピー性皮膚炎、ニキビ、湿疹など）

産婦人科疾患（月経困難症、月経前症候群、更年期障害、不妊症など）

整形外科疾患（肩こり、腰痛、神経痛、変形性関節症など）

耳鼻科疾患（花粉症、アレルギー性鼻炎、メニエール病、蓄膿症など）

その他（不安神経症、不眠症、膀胱炎、過敏性腸症候群、冷え症、虚弱体質、倦怠感など）

また、

冷えを治すことでいろいろな不調が改善することがあります。

漢方の診察方法って？

漢方では医師の五感を駆使して診療を行い、その診察方法は「四診」と呼ばれ、以下の4つから成り立っています。

望診：視覚を用いた診察（顔色、皮膚の色、舌などの観察）

聞診：聴覚と嗅覚を用いた診察（声の大きさ、においなどの観察）

問診：現病歴や既往歴などの現代医学的な問診だけでなく、体質傾向（寒がり・暑がりなど）を聞き出す質問

切診：触覚を用いた診察（脈やお腹に触れ、抵抗感や圧痛の有無を観察）

どんなお薬なの？

当院の漢方治療は健康保険の適応となるエキス剤を用いた保険診療です。

漢方薬とは生薬（しょうやく：植物の茎や根などの天然産物から不要な部分を取り除き乾燥させるなどの加工をしたもの）をいくつか組み合わせたもので、煎じた液からエキス成分を抽出して作られた製剤（エキス剤）として処方されます。エキス剤は本来の服用方法と異なってしまう場合もありますが、携帯に便利で長期保存が可能など、毎日続ける上で利点も多いのが特徴です。現在日本では、148種類の漢方エキス製剤が健康保険の適応になっています。

漢方薬にも副作用があるの？

漢方薬は天然の生薬から構成され、長い歴史の中で有効性が確認されてきた処方ですが、漢方薬でも予期せぬ副作用が生じることがあります。もっともよくみられる副作用は、胃痛や吐き気・下痢などの胃腸障害ですが、まれにむくみや血圧上昇、動悸や不眠などもみられることがあります。これらの症状は原因となった薬剤をやめることにより改善します。また、人によっては生薬に対するアレルギーにより発疹や肝機能障害、間質性肺炎や膀胱炎をおこすこともありますので、漢方服用開始後、何か気になる変化があったときは必ずご相談下さい。

どのくらいの期間のむの？

風邪や急性胃腸炎などの急な症状を治療する場合、漢方薬も比較的速やかに効果が得られます。一方、冷え症や倦怠感、月経異常などは数ヶ月～数年かけ、じっくりと改善を目指していきます。また、季節や生活状況の変化により漢方薬を増減したり変更・追加したりする場合もあるため、1日に飲む量を減らしたり、治療をお休みしたりすることもあります。こういった調節も全てご本人のお話や診察所見をもとに判断するため、長いお付き合いになります。漢方治療の目的は、不快な自覚症状の改善だけではなく、生命のバランスの乱れ、食事や睡眠など生活習慣の乱れ、心理的ストレス、環境への適応の課題など、そもそも症状が出てくるに至った背景を分析し、うまくコントロールすることによって、より健康な状態で生活していくことができるようになることです。

気になることは何でも気軽にご相談下さい。